

# 韓国 のクリスマス

## グローバル化するコリアンとキリスト教会

いまや日本とそれほど変わりのない商戦が展開され、家族や友人、恋人たちが冬のイベントとして楽しむ、韓国のクリスマス。しかしキリスト教は、日本以上に深く根づいており、国内外のコリアンにとって教会は社会活動の中心地であり、心のよりどころでもある。韓国の人びとにとっての教会とクリスマスのあり方の変容を考える。



聖母子像 (標本番号H214363)



教会行事用たすき (標本番号H214497等)



牧師用肩布 (標本番号H214489等)



在日コリアンのイブの集い



京都の韓国教会のステンドグラス

## 韓国社会とキリスト教

秀村 研二 (ひでむら けんじ) 明星大学教授

一九八四年のクリスマスは、フィールドワークをしていた韓国の東海岸にある小さな漁村で迎えた。村にはキリスト教会があったが、隣村の信者を合わせても三〇人ほどの小さな教会であり、大半の村人たちにとっては関係のないものだった。当時は田舎の小さな教会には牧師はいないことが多く、牧師の資格を得る前の伝道師が牧会をしていた。その伝道師から、クリスマスに写真を撮って欲しいと頼まれていたので、一月二十五日の夕食を終えてから教会に出かけていった。

の娘の顔も見える。伝道師による簡単なクリスマスの説教があった後は、クリスマスにまつわる歌や踊り、そして劇が子どもたちによって次から次へとなされていく。ときどき大人の信者たちの出し物がはさまる。それはちよと学芸会のようなものだった。子どもたちは信者の子どももそうでない子どもも数日前から練習をして本番に備えていた。当時の村の生活ではクリスマスは子どもたちにとって楽しみのひとつだった。しかし信者以外の大人たちにとりクリスマスは何の意味もなく、子どもたちもプレゼントをもらえるわけでもなかった。その前年のクリスマスはソウルで過

した。二月になると街のなかが何となくあわただしくなっていたが、デパートで現在のような華やかなクリスマス商戦をしていたような記憶はない。私は大学の先生のお宅にお世話になっていたが、家族にクリスマスヤンがいないためか、クリスマスだからといって特に「ごちそうが出た記憶もないしケーキを食べた想いもない。しかし小さい子どもがいる家ではクリスマスケーキを買ってプレゼントを贈るのが相当以前から一般化していたようである。韓国では二月二十五日は公休日なのだが、それはキリスト教信者が多く、政治的勢力も小さくないからである。また、仏教徒にも配

慮されて、陰暦の四月八日も公休日となっている。つまり韓国は、キリストの誕生日と釈迦の誕生日を国の休日とする世界でもめずらしい国なのである。宗教統計では仏教徒が約一〇〇万人、プロテスタント(韓国では改新教という)が約九〇〇万人、カトリック(天主教という)が約三〇〇万人である。ほかにも新宗教などがあるが信者数はさほど多くはない。仏教が信者数の第二位とはいえプロテスタントとカトリックを合わせると韓国ではキリスト教信者の方が多く、韓国の人口が四七〇〇万人ほどだから人口の四分の一以上がキリスト教信者ということになる。特に都

知り合いの李さんが通う京都の韓国教会では、クリスマスイブの礼拝の後、芝居や歌を楽しむ会が催され、韓国からの留学生がたくさん集まる。こうした韓国教会は世界の各地にある。

シドニーのチャイナタウンの近く、木曜日の夜、救世軍のビルに、グデルで「歓迎します」のポスターが貼られている。シドニーのリアンタウンを調査しに行っていた私は、そこで李さんと待ち合わせをした。李さんはシドニーの韓国教会にも知人がおり、このビルでおこなわれる「木曜讃揚集会（聖歌を歌い、説教を聞く集まり）」に参加し、それが終わったなら私と夕食を食べようということだった。夕方七時に始まった集会は、九

時近くに終わった。

李さんは、私を牧師さんに紹介し、二階に案内してくれた。そこには教会の主要なメンバーと、初めての集まりに来た人たちが座っていた。六年前から毎週二回、こうした集会をもち始めたという牧師さんは、集まった人たち一人ひとりに自己紹介をしてもらっていた。

韓国の専門大学で電気工学を専攻した若者がいた。昨日シドニーに来たばかりだという。街を歩いて、ここで韓国教会の集まりがあるのを知り、訪ねてきたという。牧師さんが、韓国にいたときの教会との関係を問うと、軍隊生活をしているとき、教会の牧師からチョコバイをももらっただけという。彼はこの地で



シドニー郊外、ストラスフィールドにある韓国教会

# 在外コリアンのよりどころ

朝倉敏夫 (あくらとしお) 民族社会研究部

化も見られる。韓国のプロテスタント教会の多くは保守的な教派であるが、礼拝にゴスルソングを積極的に取り入れるようになってきた。それもドラムスやベース、ギターなどの伴奏をとまなうものである。ある巨大教会では、新任の牧

師が伝統的なやり方に戻したところ信者数が急激に減ってしまったという。一方では教会の淘汰も進んでいる。韓国にはケッチョク・キョエ(開拓教会)という、ビルの一室を間借りして活動をおこなう小規模な教会がある。そこを

拠点に信者数を増やし、自前の教会堂をもつことによりキリスト教会全体の成長を支えてきた。しかし、そのような教会は数を減らし、信者はますます大きな教会に集中している。さらに新しい傾向として、都市近郊の田園

のなかに教会を設け、日曜日には家族で訪れて一日を自然のなかで過ごすという新しい形態も生まれてきている。いずれにせよ信者数が多いだけに多様性に富んでいるのが韓国のキリスト教といえる。

市部においてはキリスト教の比率が高く、また学歴が高くなると比率も高くなる傾向が見られる。韓国にキリスト教が入ってきたのはカトリシズムが一八世紀末、プロテスタントが一九世紀末であるが、ここまで信者が増えたのは一九六〇年代以降のことである。高度経済成長による産業化、都市化により農村部から都市部に集められた人びとの間に急速に広まっていった。信者数が数万人という巨大教会が存在するのも韓国のキリスト教の特徴であろう。日曜日ともなると礼拝に出かける人びとが聖書を片手に街なかを行き来し、信者を運送するバスが走り回る光景を目にする。また、都市部に教会が集中しており、十字架を目にするのはたやすい。だからといって韓国社会がキリスト教的なもので充ちているわけではない。

一般に、韓国社会というと儒教というイメージが強いかもしれない。実際、儒教は祖先祭祀を軸とした行動規範として社会に受容されている。ただ宗教的な側面はうすい。カトリック教会は祖先崇拜を伝統的な文化として認めているので問題はないが、プロテスタントの大部分の教会は祖先崇拜を偶像崇拜として認めない。そのため家族のなかに、キ

リスト教信者とならぶような者がいる場合には葛藤を生むことになる。特に嫁である女性が信者である場合には辛い思いをする。キリスト教信者の場合でも、父母の命日には追悼礼拝を家族でおこなうことが多い。儒教式の位牌を祀る祭祀はおこなわないが、家族で集まると故人を偲び、食事をともにするという点ではあまり変わりはない。祖先祭祀に限らず、人びとは儒教的な価値に裏付けられた伝統的な社会規範のなかで生きており、キリスト教信者たちもその例外ではない。

い、一方でカトリック教会は着実に信者数を伸ばしている。その理由として、プロテスタント教会が信者数という量的な成長ばかりに目を向けてきたからだと、カトリック教会が地道な社会活動をおこなう、また祖先祭祀の許容力があるからだといった説明がされる。しかし実際のところはよくわからない。プロテスタント教会では、新しい信者の獲得が難しくなっている。信者の三分の二程度が女性であるが、夫は信者でないことが多い。この身近な存在をどうにかして教会に出席させようという試みなどもそのひとつである。キリスト教臭さを感じさせないセミナー形式の活用なども盛んにおこなわれている。若い人たちに合わせた礼拝形式の変



1980年代東海岸の漁村の教会のクリスマス。信者は少なかったが、クリスマスは子どもたちにとっては楽しみで、クリスマスのときだけは子どもでいっぱいになった



追悼礼拝の様子。位牌の代わりに、父母の写真を前に家族で集まって礼拝をする。儒教の祭祀で夫婦の位牌が並べて置かれるように、写真も並べて置かれる



ソウルのマンション団地のなかにある巨大教会。信者数15万人ともいわれる周辺ビルでも礼拝をおこなう



イルミネーションに彩られたソウル市街。写真提供：韓国観光公社



居間に飾りつけられた大きなツリー



ソウル市内の高級ホテルでクリスマス過ごす夫婦



カトリックの修道会が運営する療養院でのクリスマス

「あなたにとってクリスマスのもつ意味は何」という問いかけに、韓国人の友人らは「家族や友達、恋人と楽しむイベント」とか「子どものための楽しいイベント」と答える。キリスト教信者が人口

しておいいたクリスマスケーキをもち帰るのは父親の役目だ。夕食は、特別をこころを作りはしないが、子どもの大好きなヤンヨムトントック（鶏のから揚げ）を甘辛いソースであえたものを出前を頼み、夕食の後は家族みんなでケーキを食べる。毎年、主婦向けの雑誌の二月号には、クリスマスケーキの作り方が掲載されるが、日本の雑誌のように「簡単で、おいしい手作りクリスマスケーキ」などという言葉は躍らない。あくまでもプロ顔負けの本格的なケーキの作り方が紹介される。Y.W.C.A主催の「母子で作る手作りケーキ教室」が開かれるといったこともあるが、一般的にはクリスマスケーキとは外で買うものであり、ケーキに関する限り、「手作り」をありがたがる風潮はない。主婦歴七年の友

人は、「手作りケーキなんて、とんでもない！材料費や手間を考えたら、買ったほうが楽だし得よ」ということで、毎年ホテルのペーカリーで買うのだそうだ。居間やベランダには、大きなクリスマスツリーが置かれる。ツリーの高さは、住まいの広さによって変わる。二五坪以下なら一メートルまで、二五坪以上なら、それより大きなものになる。前述の友人の場合、三五坪のアパート（日本でいうマンション）なので、一メートル七〇センチのツリーを用意し、地下街で買ったきらびやかなオーナメントを飾りつける。別の友人は、同じ坪数でも一メートル九〇センチとさらに高い。アパートが林立する韓国では、隣の棟のベランダが比較的によく見える。だから、ツリーの飾りづけも他人の眼にどう映るかまで考えな

ければならないから大変だ。家族間でのクリスマスプレゼントやクリスマスカードの交換もおこなわれる。子どもがサンタクロース（サンタのおじいさん）にお願いした外国メーカーの〇〇足限定モデルのスニーカーを、速くの店まで車を飛ばして買いに行くなど、子ども達の夢をかかえるのに両親もひと苦労である。クリスマスカードの交換は、もっぱら若い世代間でおこなわれている。年配の方々は、年始めに年賀状をだすのが一般的だからだ。こうした家族水入らずのクリスマスを過ごすのは、子どもが小学生のうちだけで、中学生ともなれば、友達同士連れ立って、繁華街のショッピングにクリスマスケーキをもち込んでおしゃべりし、最後はブレパン（カラオケボックス）

の約四分の一を占める韓国では、クリスマスは信者にとって宗教上重要な日であるが、二月二日は公休日ということもあり、信者であつてもそうでなくとも、イブの夜からクリスマス当日にかけて多

くの人が家族や友達、恋人などと思いつきの時間を過ごす。二月二日、四日、クリスマスイブ。午後六時をまわると、ソウル市内の地下鉄は退勤ラッシュが始まる。いつものラッシュアワ

へ行って盛り上がる。恋人同士なら、まずは映画をみてから食事をするか、それともクリスマスの特別イベント満載の遊園地で過ごすかだ。だから、韓国ではイブの夜は、映画館とブレパンは超満員である。また、最近では、スキー場で過ごす人も増えつつある。一方、子どもも果立った年配の人びとのクリスマスは、いたつて静かなものである。孫が来る予定があれば、ケーキくらいは用意するが、そうでなければいつもと変わらぬ一日にすぎない。

ソウルでの一般的なクリスマスの過ごし方とは、以上のようなものである。日本に比べ、キリスト教信者が多い韓国ではあるが、信者であるか否かの違いは、夕食後、教会に行つて礼拝に参加するかしないかという程度にすぎない。

# ソウルのイブ

守屋 亜記子（もりや あきこ） 総合研究大学院大学文化科学研究科



クリスマスイブの礼拝で賛美歌をうたう聖歌隊



写真上・下とも京都インマヌエル宣教会にて。写真提供：宇安伸樹

英語を勉強し、仕事をしたいと思つているといふ。私は、アメリカ合衆国でもコリアンアメリカンの生活を調査したが、そこでも教会が大きな役割を果たしていた。韓国人が合衆国に来てぶつかる大きな問題は、英語の習得と仕事探しだ。教会は、そのふたつを提供してくれる場であつた。海外に展開する韓国人社会において、キリスト教会はそのコア・センターとしての機能を担っている。今年の一月八日の「中央日報」に、「海外宣教師、米国に次ぐ二位」という記事があつた。海外宣教の窓口である韓国世界宣教師協議会によると、現在、韓国教会の名をもつて海外に派遣された宣教師は一六〇カ国におよび、一万三〇〇〇人が活動中とのこと。海外宣教の元年は一九七九年。宣教を始めて一

九年目の一九九八年に五〇〇〇人を超え、爆発的な海外宣教は伝統的なキリスト教圏でも例をみない伸張という。その背景には、韓国内の牧師の飽和状態があるとはいへ、「改新教（プロテスタント）の新しい中心」という韓国教会特有の詔命意識がある。改新教が作ったキヤプツフレースの「全世界の福音化」のもと、海外派遣対象国は汎地球的だ。キリスト教圏のみならず、中国や中央アジア、ロシアなどに存在する朝鮮半島出身者に対する働きかけも無視することはできない。現在、韓国の海外同胞は、世界に七〇〇万人。世界の各地にコリアンタウンが生まれている。平和を求めるキリスト教には似つかない表現ではあるが、宣教師はその先兵であり、教会はその基地となっている。